

第1章 戦場

北海道での終戦①

すべてが戦争だったあの頃

小野 茂さんのお話から

○満州事変 昭和六年（一九三二年）から八年の間の日中間の武力紛争。この時、日本の関東軍が、中国東北地方（満州）を占領し満州国を建国した。

○日中戦争 昭和十二年（一九三七年）から二十年の間、日本と中華民国との間で行われた戦争。盧溝橋事件をきっかけに起きた。

○在郷軍人 平時は民間にあつて生業につき、戦時・事変に際しては、必要に応じて召集され国防に任ずる予備役などの軍人。

○銃後 兵士を除く日本国民全員や日本国内全土のこと。

○陸軍特別幹部候補生

私が小学校に入学してまもなく、満州事変が始まりました。その後、昭和十二年（一九三七年）日中戦争が起きました。その頃から日本は軍国色一色になり、軍人が内閣総理大臣にまでなっており、国民には軍隊に関する話や教育が多くなってきました。体操の時間は学校の先生が教えていたのですが、日中戦争がだんだん激化してくると、在郷軍人という兵隊に行つて帰ってきた人たちが教えるようになりました。体操の時間には腹ばいになって前進するほふく訓練があり、「突撃」と号令がかかると腹ばいから立ち上がり、いつせいに竹やりを持つて、「やーっ」と突く訓練も行われていきました。そういう中で、日本はアメリカの艦隊を爆撃して、太平洋戦争に突入していきました。税金は鉄砲や大砲、戦車、飛行機、軍艦などをつくるために多くが使われたのです。国民に回ってくる税金はほんのわずかだったので、生活は本当に大変でした。銃後の人たちは、戦争に行つた人の分まで国内で物をつくらなければならぬ、働かなければならないから、なおさら大変でした。

私が兵隊になつたのは、すべて戦争に目を向けるような教育を受けていたからです。そのころ、陸軍幼年学校、海軍兵学校、飛行学校というように軍隊の勉強をする学校がたくさんあり、志願して行っていました。私も昭和十九年のときに、陸軍特別幹部候補生の試験を受けて合格しました。軍人になることを目的に入っていますから、戦争のこと、国を守ることを専門に勉強するのです。

入隊先である静岡県浜松陸軍航空隊へは、三泊四日もかかりました。北海道出身の志願者は

太平洋戦争末期の日本で陸軍の短期現役下士官を養成する制度。

○軍用列車 軍隊が鉄道を使い、前線への兵士・兵器・物資の輸送などのため運行する列車。

○徴兵検査 徴兵適齢の男子に、兵役の適否を身体・身上にわたって検査すること。

○日章旗 日本の国旗のこと。

○駒場駅 北海道河東郡音更町にあった国鉄士幌線の駅。

○千人針 一片の布に千人の女が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫い玉をつくり、出征将兵の武運長久、安泰を祈願して贈ったもの。

○国防婦人会・愛国婦人会 昭和十七年（一九四二年）六月に統合して、大日本婦人会札幌支部とな

旭川の陸軍第七師団にいったん集められ、そこから軍用列車で向かったからです。浜松に行く途中は環境が悪く、風邪をひく人がけっこういました。私もそこで風邪をひいてしまいました。四十度を超える高熱だったため、体を治すために北海道に帰されました。それで戦争に行かなくてもよいのかというと、そうではなく、徴兵検査があつて入隊することになりました。すると、家の周りの人がお祝いをもってきてくれます。幅三十センチメートル、長さ一・五メートルぐらいの生地「祝入営 小野茂君」と書かれたのぼりが何本も家の前に立ちます。出発の時には、そののぼりを先頭に、寄せ書きをした日章旗を肩に十字にかけていきます。地域に住む人たちが軍歌を歌いながら、駒場駅まで送ってくれました。出征する人たちは、白い生地に赤い糸で結び目を千個つけた「千人針」というものを贈りました。国防婦人会・愛国婦人会が中心になって作った腹巻きで、みんなが無事を願ったのです。

最初は武山の海兵団に一月ほどいて、次は北海道の厚岸防備に転属となりました。ここで大変怖い思いをするこ

すべてが戦争だったあの頃



イメージ図

出征

る。一家庭から一人は大日本婦人会会員とされた。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。

とになります。当時、日本のどこにいてもアメリカの飛行機が飛んできて、空襲があるという状況になっていました。昭和二十年七月十四日の朝、突然、米軍機が超低空で来て機関銃で「バババババ」と撃ってきました。機銃掃射というものです。目の前でバタバタと何人かがやられるのを見ました。逃げるに逃げられないなかでの攻撃でした。私は、運良くたまたま兵舎の中にいたため、敵の飛行機からは見えなかったのです。表にいたら間違いなく撃たれていたと思います。この攻撃で亡くなった人のことを考えると、「自分だけが生き延びた。助かっていいのだろうか。」などとも思いました。厚岸だけではなく、全道各地が爆撃された空襲でした。函館



イメージ図

千人針を作る女性達

すべてが戦争だったあの頃

の連絡船も何隻か沈没させられました。

太平洋戦争が終結した後の国民の生活は、食べるものや着るものが十分になく、悲惨なものでした。生きるためには何でも食べていかなければならないのです。カエルやヘビを食べた人もいます。

○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

戦争中は女性がいちばん苦勞したとも思います。男の人たちに召集令状がくると、軍隊に行かなければなりません。残された家族でその後の生活をしていかなければならなかったのです。

戦争が終わって、日本は平和になりました。今は世界に誇れる経済大国にまで発展しました。平和というものがどんなに人を進歩させるかということなのです。

今、みなさんは平和の中に生きています。これが当たり前になっ
ていて、気づいていないと思います。どうか当たり前のことだと思わずに、勉強していくことを願います。そして、世界をリードする立派な人になってください。

DATA

平成21年度北区平和事業

聴き取り

- ・平成21年7月21日
- ・新琴似小学校



小野 茂(おの・しげる)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市北区在住